知し得らるべきなり。

第二章　地理

位置及疆域

本村は西成郡の南端に位し、大阪市より今宮、玉出の兩町を隔てたる南方一里餘の所にあり、住吉神社の西北部に當れり。東は急斜面を以て、東成郡住吉村の高地に連り、南は材木川の小溝を隔てゝ、住吉公園の勝地を控へ、更に其の一部は墨江村大字濱口に境す。西は十三間川の細流を隔てゝ、東成郡敷津村及び本郡津守村に對し（一部は十三間川の對岸にも村域の存するものあり）北は小溝及道路を以て、本郡玉出町に連る。其の形狀略平行四邊形をなし、東西七町餘、南北凡そ八町、面積零、〇五二方里、之が坪數二十四萬九千餘坪にして、西成郡中、福村及び傳法町に次ぐ第三位の小村なり。

地勢

本村は大阪城を起点として、南方天王寺、住吉を經て、堺の東部に連互せる洪積土の丘阜、即ち難波岡陵の西邊に連なる沖積層の、底地の一部を占むるものなれば、土地極めて平坦にして、村内の最高地點たる、住吉村との境界附近に於ても、尚ほ海拔十米突を出でず、其の他は海拔四五米突の平地をなすこの地もと住吉浦又は津守浦の海面に屬せしが、淀川其の他の河川より流出する泥砂、或は潮流のために、海底漸次露出して、洲渚となり、更に變じて全たく陸地と化したる所なるは、僅々二千餘年の人文史に徴するも明白なる事實なり。次に河川は大和川より分岐して、村の西邊を過ぎ、北方木津川に注げる十三間川の細流ありて、春秋冬の三季は舟揖の便ありと雖も、夏季は概ね涸渴し、ために灌漑の用をなさず。また村の南端、住吉公園との境界を西流する材木川は。其の源を住吉村の萬代池に發し、其の末端は十三間川に注ぐ。是れもと文化元年（百二十一年前）住吉神社本殿造營の砌、木材運搬の便を圖るために開鑿せられたるものにして、昔時幅員三間餘を有し、明治二十四五年の頃までは輕舸の運行を見たりと雖も、流水常に停滯して臭氣甚だしく、頗ふる不潔なりしかば、後其の大部分を埋立てゝ、今は幅員僅かに六尺餘の一小溝をなすのみ。尚ほ此の他村内には數條の小溝あり、何れも住吉村の高地より發し、域内を東西に貫きて西部十三間川に注ぐと雖も、平時は涸渴して流水を見ず、唯降雨の際に之を見るのみ。斯の如く村内は土地平坦なるがために、耕地大いに開けたりと雖も、水利の便に乏しくために耕地は悉く火田にして、水田の存するもの僅かに三反歩餘に過ぎず。

地質及地味

本村は既に述べたるが如く、沖積層の上に開けたる村にして、下部は砂層なれども、上部は壤土にして、土砂適宜に混淆し、而かも地味極めて沃饒なるが上に、土地平坦なれば耕地大いに開けたりと雖も水利に乏しく、ために全面火田にして、主要農産物は古來棉、麥、蔬菜、甘藷等最も多く、米の收獲に就いては殆んど見るべきものなし。

備考　沖積層は水成岩中最新の地層にして、各種岩石の霽爛若くは崩壞せしものが、現今の海水及び河流の氾濫に因つて、堆積せるものにして、其の成層期は最も新らしく、殊に本村の如きは、地質學上より見れば殆んど云ふに足らざる最近時たる、人文史上に知らるゝ所なり。是れ即ち第四期層の新層にして、其の土地は多く頻海若くは河邊の平地にして、都て平坦卑低なり。

氣　象

本村は村内に氣象觀測の設備なければ氣溫、風位、雨量等に就きて精密なる研究をなす事能はずと雖も、其の位置大阪市と堺市との中間に位し、殊に近年大阪市の著しき膨脹に伴ひ、戸口も頗ぶる稠密となり、漸次都會化するの傾向を有するものなれば、氣溫の如きも年々に其の度を增し、其の他凡ゆる方面に次第に都市的徵候を帶びつゝあるは勿論の事なり。されば村内の氣象は略兩市に於ける氣象觀測の結果より推斷し得らるゝ所なるべしと信ず。

先づ氣溫に就いて之を見るに、概ね溫順適和なりとなすべく、冬季最底溫度は大阪市に於ける大正元年以降の平均零下三度四分、堺市に於ける同平均零下一度一分を示せり。されば本村は恐らく其の中間即ち零下二度前後なるべく、而かも前記兩市の最底溫度は逐年上昇するの傾向を帶ぶるものなれば、本村の最底溫度も亦同樣の傾向を有するものと見做すべきなり。次に夏季最高溫度は大阪市に於ける平均三十五度八分、堺市に於ては同三十五度五分を示せり。されば本村も亦略之と同樣なりと見るを得べく更に一ヶ年の平均氣溫も亦兩市の平均より推測せんか、恐らく十六度五、六分の所にありと見れば大差なかるべし。尙ほ一面本村は其の位置海岸に近く、而かも金峯、葛城、生駒等の山脈は河内の平原を隔てたる後方に聳立すと雖も其の距離遠く、ために之等山脈の影響を受くる事少なく、專ら海洋の影響を受け、四時氣溫の調節せらるゝものあれば、頗ぶる生活に便なり。殊に夏季に於ては戸口未だ左程稠密ならざるを以て、大阪市内並に堺市に比して著しく凌ぎよし。風位は夏季に於て西南の和風多く、冬季に於て北西又は北東の風多し。

雨量も亦精密なる數字を以て示すこと能はざれども、之亦大阪、堺兩市の降雨量を見るに、前者は最近に於ける一ヶ年の平均雨量千二百四十六粍、後者は千百八十粍を示せり。されば本村も亦千二百粍前後なりと見れば大差なかるべし。次に一年間を通じての降雨量の狀態を見るに、一月は降雨量最も少なく、二月には稍增加し、三四月の候には蕭條たる春雨多く、五月は幾分其の量を減じ、六月に至りて著

しく増加し、多く一ヶ年の最大降雨量を示す。尋いで七月には稍其の量を減じ、八月は更に著しく減少すれども、九月には又雨量多く、時に一ヶ年の最大降雨量を示すことあり、夫より漸次十、十一、十二月と減少して、十二月は一月に次ぐ降雨量の最も少なき月なりとなす。尚ほ此の地の降霜期は例年十一月の中旬にして、終霜期は四月の上旬なれども、年毎に漸次其の期間は短縮せらるゝの傾向を有し、又降雪は十二月下旬より三月中旬頃までの間に於て屢々見らるゝ事ありと雖も、其の量甚だ少なく、殊に近時年毎に其の量を減少するは、等しく都市的徴候を帶びたる結果なるべし。又七、八月の盛夏の交には屢々雷雨ありと雖も、近年村内に落雷の被害ありしを聞かず。

區劃

本村は昔時中在家、今在家の二村に分れたるも、明治二十二年町村制の實施に先立ち、同十九年三月兩村合併して粉濱村を樹立せるがために、村内に大字を置かず全村を一單位となし、以て地番を附するのみ。然れども村内には二十有餘の地字を存す。されば左に之を示さん。

粉濱	自二五五番地至二六三番地 三六三番地	高岸	自二一九番地至二五四番地 八六三番地
高畑	自三〇九番地至三四五番地	中開	自二九四番地至三〇八番地
阪	自一一七番地至一一七番地	東ノ口	自三九四番地至四七七番地
八幡	自一一八番地至二一八番地		
今開	二八三番地 八六四番地		
キトラ	自三四五番地至三九三番地 三九五番地ノ一〇		

東大野　自四七八番地至五一八番地
大開　自五九二番地至六〇七番地
木津道　自六六九番地至六九〇番地
十王前　自七三八番地至七九七番地
西大野　自五一九番地至五五六番地
溝ノ側　自六〇八番地至六二九番地
岸ノ下　自六九一番地至七〇七番地
野路　自八〇一番地至八五三番地
古屋敷　自五五七番地至五九一番地
北溝筋　自六三一番地至六六八番地
陣屋前　自七〇八番地至七三七番地

尚ほ中在家明細帳に依れば昔時は此の他に

ばん畑　道の端　ねふつ川　西らて筋　領境筋　山の下筋　道ばた　山の下　谷道

等の字地あれども今は其の位置詳かならず

斯くの如く村内には地字名存すれども、一般村民の之を用ふる者少なく、村民は多く中在家、今在家新家の稱に依つて區別するを常とせり。即ち中在家、今在家は舊村名にして、新家は村名にあらずして前記兩村の屬邑なれども、紀州街道に沿へるがために古くより人家密集して、一村落をなせしかば、之を兩村に對立せしめて斯く三個に區別するものなり。

第三章　戸數及人口

本村は既に述べたるが如く、面積極めて狹少なるが上に古き時代は勿論、近く明治三四十年の頃まで村民は多く漁、農を以て生活を續けしかば、其の位置住吉神社に近く、而かも大阪市と堺市との中間に

位し、頗ぶる樞要なる地を占めながら、左程人口の增殖を見る事なかりき。唯僅かに東部紀州街道に沿へる新家の、舊幕時代に茶店、料亭等軒を連ぬるありて、住吉社參の客は素より、四時遊客の絕ゆる事なかりしかば、人家稍密集するものあり、ために當時人口も多少見るべきものゝ如し。されば中在家明細帳に記せる天保五年（九十一年前）の中在家村の戶數百九十八、人口七百七十八を數ふ、而して當時は今在家村の戶口は遙かに多かりしと云へば、恐らく當時に於ける兩村の人口は千七、八百以上に達せしものならん。然るに明治維新後交通機關の變遷と共に、新家附近は昔日の面影を失ひ、ために戶口著しく減少して、明治十二年に於ける兩村の統計を見るに、中在家村は戶數百八十八、人口六百八、今在家村は戶數二百五、人口六百八十六、合計戶數三百九十三、人口千二百九十四に過ぎざりき。斯くて同十八年十二月には戶數四百四十五、人口二千九十六となり、同二十二年町村制實施當時に於ては戶數四百六十五、人口二千三百五十二なりき。

是より先南海鐵道の前身たる阪堺鐵道は、明治十八年に大阪大和川間の運轉を開始し、同時に住吉停車場を本村內に設けしかば、交通の便著しく加はれりと雖も、當時は大阪市の膨脹左程著しからざるが上に、當時漸やく衰退に向へる新家附近の繁昌は、返つて鐵道の便を得たるがために益々其の繁昌を失ひ、ために村內はむしろ戶口を減少するの結果に陷り、明治三十年末に於ける村內の戶數は四百三十二人口二千二百五十七に過ぎざりき。然るに其の後同三十三年には大阪合同紡績住吉支店の大工場の設けらるゝあり、茲に始めて人口增加の徵現はれ、同三十五年には戶數五百七十九、人口三千六百八十三となれり。然れども其の後同三十七八年には日露の戰役起り、國事多端の時代に遭遇せしかば、再び戶口の增加を見る事なく、同四十年末に於て尙ほ戶數六百八十、人口四千四百餘に過ぎざりき。然るに此の年紀州街道に沿ふて阪堺電車の敷設せらるゝあり、南海鐵道亦電車の運轉を開始せしかば、茲に交通の便著しく加はり、しかのみならず此の頃より大阪市の膨脹日に著しきものあり、四圍の事情は益々本村の發展を促進する事となり、從つて戶口の增加亦著しく、同四十三年には戶數一躍千三百十三、人口六千九百六十八の多きに達せり。尋いで大正四年末には戶數千三百三十五、人口七千五百四十三となり、爾來益々增加し、遂に同十三年末には戶數實に二千六百十一、人口一萬九百十一の多きに達せり。左に戶口の增加に就いて表示せん。

年次	戶數	戶數比較增減	人口	人口比較增減
明治十二年	三九三	—	一、二九四	—
同　十八年	四四五	五二	二、〇九六	八〇二
同　二十二年	四六三	一八	二、三五二	二五六
同　三十年	四三三	▲三	二、二五七	▲九五
同　三十五年	五七九	一四七	三、六八三	一、三二六

同　四十年	六八〇	一〇一	四、四一一	七二八
同　四十三年	一、三一三	六三三	六、九六八	二、五五七
大正　四年	一、三三五	三一	七、五四三	五七五
同　九年（第一回國勢調査）	一、八八一	五四六	八、二七一	七二八
同　十三年	二、六二一	七四〇	一〇、九二一	二、六四〇
同　十四年（第二回國勢調査）	三、二三三	六〇二	一三、二三一	二、三一〇

第四章　沿革

開發以前に於ける本村

本村が古き時代は素より、最近に至るまで全然閑却せられて、國史上殆んど其の存在をすら認めらるゝことなかりしは既に述べたるが如くなれども、尙ほ本村が始めて開發せられてより、既に七百六十年の星霜固より尠なしとせず、加之村は其の位置大阪、堺兩都市の中間に位し、且つ其の地は我國古代の海外交通の要津として、國史には素より我國經濟史上並に文化發達史上、極めて重要なる地點として知られたる住吉の地に連なり、加ふるに二千年の長きに亘りて燦然たる歴史を有し、上は歴代皇室の崇敬厚く、貴族武將は素より下は樵夫海人に至るまで、等しく崇敬の的とせる、住吉神社の近く鎭座せらるゝものあり、而かも神社との關係亦淺からざりしこと等より推察せんか、本村が直接其の名の國史上に著はるゝものなしと雖も、其の存在は又以て國史上頗ぶる重要なるものなくんばあるべからず。

而して本村が始めて開發せられて、獨立の一村落を形成するに至りしは、平安朝の末期保元、應保の頃にして、其の以前の此の地が如何なる狀態なりしかに就いて考究せんに、何等記錄の徵すべきものなければ、今之を詳かにする能はずと雖も、和名抄に住吉郡を五鄕となし、住道、大羅、杭全、榎津、餘戸を擧ぐ、而して住道鄕は現時の中河内郡なる矢田、瓜破兩村の附近を指せるものなるべく、矢田村に住道なる地名の殘れるもの即ち其の故地なり。大羅鄕は即ち現時の東成郡依羅、長居兩村の地なるべく又杭全鄕は其の北に連なり、今の東成郡平野鄕町及び喜連村の地にして、榎津鄕は郡の中樞部を占め、今の住吉、墨江兩村及び堺市の北部に互れるものなるべく、こは幾多の遺蹟或は其の他地名の今に殘れるもの等より推察せんか略間違ひなきところなるべく、史家の意見亦略一致するところなり。而して餘戸鄕は榎津の餘戸にして今其の所在詳かならず、一說に阿部野はあまべの轉訛せるものなるべく、されば餘戸鄕は即ち現時の阿部野附近なりとなすものあり、又或ひは現時の本村及び玉出附近を指せるものなりとなすものあり。然れども阿部野は其の位置より考察せんか、むしろ百濟郡の西部鄕に屬したるものなるが如し、されば恐らく後說眞に近かるべく、即ち當時本村の附近は住吉の屬地にして何等重きを

置かるゝ事なく、從つて人煙も左程繁殖することなかりしものゝ如し。されば耕地の如きも殆んど開拓せらるゝものなく、其の大部分は所謂難波の蘆原の一部として、何等顧みらるゝところなかりしや必せり。

更に遠く古代に遡らんか、恐らく本村の地は住吉浦の海濱にして、其の大部分は海底に屬したるものなりしならん。而してこは村の東方なる住吉村の高地に住吉岸、岸の松原、岸の姫松、玉出島、玉出岸等の地名殘り、又住吉神社の正面なる反橋、鳥居の附近より南方の一帶を昔時潮崎と呼びたるが如き、或は神社の南邊を住吉細江と稱したるが如き、幾多の事蹟に徵するも略之を推察し得らるべし。即ち本村の東部は住吉村の高地に連るものなるが、其の附近の高地を古來住吉岸又は姫松岸と謂ひ、其の上に茂れる松を岸の姫松或は岸の松原と稱し、其の何れも岸の名を用ひたるは、是れ明かにもと此の附近が海岸なりしを物語れるものにして、又往古此の附近は住吉の勝區なりしかば、之に關する古詠頗ぶる多し。左に其の數首を示さん

萬葉集　悔しくも滿ちぬる潮が住の江の岸の浦わゆゆかましものを　讀人知らず
同　白波の千重に來寄する住吉の岸の黃土ににほひてゆかな　車持朝臣
同　住吉の岸の松がねうちさらし寄り來る波の音もきよしも　讀人知らず
同　暇あらば拾ひに行かん住吉の岸に寄るてふ戀忘れ貝　讀人知らず
拾遺集　すみの江の岸の藤波わが宿の松のこずゑに色はまさらじ　平兼平
後拾遺集　住吉の浦風いたく吹くぬらし岸うつ波の聲しきるなり　兼經
夫木集　住吉の岸の松原そのかみにわが大君のみゆきしところ　角麻呂
古今集　我見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松いくよへぬらん　讀人知らず
萬葉集　住吉の岸に家もが沖にへに寄する白波みつゝおもはん
同　馬なめて今日わが見つる住の江の岸の黃土を萬代に見ん

即ち是れに依つて見るも、此の附近がもと海岸の松原にして、頗ぶる風光明眉なりしことを想像し得らるべく、若し海岸にあらずして、現時の如く海岸より遠く隔たりたるものなりとせんか、何人か其の風光を賞するものあらんや、其の今日殆んど顧みらるゝところなきを見んか思ひ半ばに過ぎざるべし。

更に住吉神社の北に連なる大海神社の附近を、玉出島又は玉出岸と謂ひ、往古八十島祭のありし所なりと傳ふ。即ち其の地名に島と謂ひ、岸と稱するは何れも亦此の附近が海岸なりしを思はしむるものにして、又八十島の祭に就いては抽中抄に

代のはじめにぞ、八十島の使とて、内の御めのとのたちて、八十島めぐりといふことはべる、それも島々にてはらへすべきを、住吉の濱のこなたにて、西の海に向ひて、もろ〳〵の島々の神をまつるなり

とあり、即ち是れに依つて見るも、亦玉出島が其の前面は直ちに海濱なりしを想像し得らるべし。次に住吉神社の南邊細江川の流域は、之もと所謂住吉細江にして、往古の住吉水門は此の附近なりしと傳ふされば是れ等の地名或は遺蹟に依つて推察せんか、現時の本村の地が其の大部分は海底に属したるものなりしは、略之を想像し得らるべきなり。

而のみならず南方なる堺が上古より海港として發達せるにもかゝわらず、中古以前は專ら東部の高地に於て發達せるが如きは、明かに現時の堺市附近が海中なりしを證するものにして、又現今大阪市の中心地點をなせる船場、島の内邊が其の名の示せるが如く、昔時海濱なりしは明かなる所なり。されば之等の事實に徵し、以て本村の附近の地形を想像せんか、現時の本村の大部分が全たく海面に属したりしは、動かすべからざる所にして何人と雖も之を否定し能はざるところなるべし。

以上述べたる所は專ら附近の古實並に遺蹟等に依つて、本村の地が上古海底なりし事を推究したるものなれども、更に飜つて近世に於ける附近の地形の變遷を見んか、近く二百二三十年前までは村の西邊は直ちに住吉浦の海濱なりしが、其の後海面は著しく埋沒せられて、續々と新田の開發せらるゝものあり、ために陸地は著しく其の面積を増加し、遂に今や海岸は村の西邊を去る一里餘の遠きに及べり。而して斯くの如きは獨り自然の作用のみにあらず、人力に依る事亦大なるものありと雖も、此の事實に基いて遠く古代に逆つて之を推究せんか、當然本村が海底なりしを想像し得らるべし。尚ほ村内何れの地に於ても地下十尺餘を堀れば、貝殼等を混入せる砂層を見、又先年村の中央部の地底より船体の破片を堀出せる事等に徵するも、本村の地が往古海底に属したりしものなるは明白なる事實なりとなさざるべからず。

斯くの如く本村が遠き古代にありては全たく海中に属したる事は、何人も否定し能はざる所にして當時此の附近の海を住吉浦又は津守浦と謂ひ

萬葉集　住の江の沖つ白波風吹けは來寄する波を見れは清しも　讀人知らず

後拾遺集　住吉の浦風いたく吹きぬらし岸うつ波の聲しきりなり　恵慶

萬葉集　大船の津守の浦に告んとはまさしに知てわかふたりねし　大伴皇子

千載集　神代より津守の浦に宮ゐして經ぬらん年の限りしらすも　隆季

等の古詠多し。されば此の地の古き歴史を考究せんと欲せば、先づ住吉の歴史を探究し、以て本村の地が古來如何なる地位にありしかを知らざるべからず。從つて本書は茲に神代より平安朝の末期、本村が始めて開發せられて粉濱村の稱を用ふるに至るまでの、住吉の歴史に就いて之を略述する事とせん

神代に於ける住吉

遠き神代史の研究は纔かに古事記、日本書紀等の古代文獻、或は風土記の記事に依り、或は當時の遺